

和歌山だよいい

平成22年
(2010) 8月号



瀨峡 (新宮市)

CONTENTS

1. 知事メッセージ…………… P1
2. 和歌山県政トピックス…P2～P8
3. お知らせ…………… P9～P10
4. ふるさと歳時記…………… P11



カタバミ

「サッカーワールドカップ」

サッカーのワールドカップにおける日本チームの活躍は日本中を熱狂の渦に巻き込みました。岡田監督率いるサムライジャパンと称する日本チームは当初の予想に反してグループリーグを突破してベスト16に進出し、南米の強国パラグアイと大熱戦の末、ペナルティキック(PK)合戦で敗れました。

日本チームの紋章は言わずと知れた熊野の八咫鳥^{やたがらす}、熊野の神々の御加護を得てよく戦いました。日本で一番初めにサッカーを導入したのが那智勝浦町出身の中村覚之助氏^{かくのすけ}といういわれをも知るにつけ、日本サッカーチームは和歌山のチームのように思えてくるのです。その中で、不動の右サイドバックは海南市出身の駒野選手で、惜しくもPKをバーに当てましたが、鉄壁の守りで日本チームのピンチを何度となく防ぎました。和歌山の誇りです。その功績をたたえて和歌山県スポーツ特別賞をお贈りしました。

その日本チームが敗れた後、岡田監督の談話で次の2つの言葉が胸を打ちました。「私について来てくれて頑張ってくれた選手に本当に感謝したい。」「そういう選手たちを勝たせてやれなかったのは、私の責任。私の執着心と執念が足りなかったと感じている。」

名監督の言葉を味わいながら、私は県政を思いました。第1に、私の就任以来、改革に次ぐ改革によく耐え私について来てくれた県の職員諸君に私も感謝したいということです。第2に、県の勢いを取り戻し、和歌山を元気にする戦いは、まだまだ緒についたばかり、少しぐらいの成果に安住することなく、自己満足することなく、まさに執着心と執念を持って県政に専心しなければならないということです。



「第42回紀州おどり」での仁坂知事。当日は、多くの観客で賑わいました。(関連記事P6)

今月の和歌山県政トピックス

* 最近の県政の動きや県内の話題などをピックアップしてお届けします。

●「全国知事会議 in 和歌山」を開催！

・7月15日、16日の2日間の日程で近畿では10年ぶりに、全国知事会が和歌山市で開催されました。

・参議院選挙の結果、国会におけるねじれが発生し、今、我が国が本当に緊急に手をつけなければならないことが、政党間の対立によってすくみ合いのような形で放置されるおそれがある中で、それぞれの都道府県民の付託を受けた知事が力を合わせてこの国をリードしていこうという方向がよく示せた建設的な大会になりました。

【全国知事会議】

・仁坂知事は、会議冒頭のあいさつで、「熊野の地は古来より「蘇りの地」とされてきました。地方は弱ってしまって元気がありませんが、本県で開催される今回の会議が、「地方の蘇り」につながることを期待します。また、和歌山県は紀州藩時代に明治維新の先鞭をつけるなど、新しいものを取り入れる気風を持っていました。今回の全国知事会でも、新しいアイデアが生まれ、有意義なものとなることを祈念します。」と述べました。



・会議では、参議院議員選挙の結果を踏まえた今後の知事会活動や地域主権関連3法案の早期成立、国の出先機関の原則廃止、一括交付金の制度設計、これからの子ども・子育て支援施策、新たな高齢者医療制度、地方税財政の確保・充実など多岐にわたる項目について議論を行い、国に対しての提言をまとめました。



・仁坂知事は、「国の出先機関改革については、出先機関の権限だけでなく、本省の権限を併せて持ってくるのが重要であると思います。そのためには、国に残すべきものについての議論が必要です。また、地方にできることだと言って、無条件に地方に移すことはあってはなりません。」などの意見を述べました。

・会議の中で、全国知事会が運営する「先進政策バンク」に登録されている2,162件の中から「防災・危機管理分野」で、本県の「空から知る危険～土砂災害航空写真マップ～」が優秀政策に選定されたことが発表されました。本県の政策が優秀政策に選定されるのは、3年連続の快挙です。

・会議終了後の記者会見では、麻生渡全国知事会長（福岡県知事）から、心のこもったおもてなしをいただいた仁坂知事をはじめ和歌山の皆様のおかげで、会議を無事に開催することができた旨のお礼をいただきました。また、仁坂知事からは、「日本を蘇らせるために、47人の知事が集って



知恵を出し合い、行動していこうと確認できたことは大きな成果であると考えています。また、県民の方の協力・参加もいただき、麻生会長をはじめ大変良い評価をいただいていることから、良いおもてなしができたのではないかと思います。」と述べました。

●「全国知事会議プレイベントシンポジウム」を開催！

・7月14日、全国知事会議開催のプレイベントとして、地域主権改革の推進や関西で設立を目指している関西広域連合の意義について、県民の方々に広く周知を図り理解を深めていただく目的でシンポジウムを開催しました。



・仁坂知事は冒頭のあいさつで、「地方の行き詰まりを打開するためには、中央集権とは違ったモデルとして、地方分権・地域主権による国づくり、地域づくりを進めることが重要。地域を元気にするための方策や考え方、関西広域連合の活用について議論したいと考えています。」と述べました。

【基調講演】

・元自治事務次官の松本英昭氏から「関西広域連合への期待と課題」と題して講演をいただきました。

・旧自治省在職時に広域連合制度の創設に携われた経験から、当時の話を交えて、府県間の広域行政体制整備の必要性や関西広域連合への期待、広域連合制度の発展のための方策等について、示唆に富むお話をいただきました。

【パネルディスカッション】

・「地域主権改革の実現に向けて～改革の実現と関西広域連合～」と題し、コーディネーターに秋山喜久氏（関西広域機構会長）、パネリストとして松沢成文氏（神奈川県知事）、小嶋淳司氏（がんこフードサービス株式会社代表取締役会長）、多田稔子氏（田辺市熊野ツーリズムビューロー会長）、仁坂知事によるパネルディスカッションを行いました。



・秋山コーディネーターから、「リーマンショック以降、特に地域経済を含む日本の経済情勢は疲弊していますが、中央集権体制が要因の一つではないか。」との問題提起がありました。

・松沢神奈川県知事は、中央集権体制の打破には地方自らが行動し攻め登ることが必要であることや首都圏広域連合への取組について発言されました。

・小嶋会長は、関西経済は停滞しており関西の府県が協力して全体として経済発展や人口減少に対する対策を講じることが必要と発言されました。

・多田会長は田辺市熊野ツーリズムビューローの活動の紹介と着地型観光の重要性を発言されました。

・仁坂知事は、「やる気を起こさせるインセンティブ（刺激）のある政策が重要で、また、高速道路の整備など行政の責任としてチャンスと同じようにすることが必要です。義務教育や最低限の生活保障、防衛、経済規制など、この国を規定するものやナショナルミニマ

今月の和歌山県政トピックス

ムの保証は国で行うべきであり、望ましい国、地方のかたちを地方が発意して国に提唱することが重要です。」と述べました。

・また、和歌山県が関西広域連合に参加する意義について、仁坂知事から、「本県の発展には関西の発展が必要不可欠で、関西広域連合は元気な関西圏づくりにつながることから参加したいと考えている。設立当初から参加することにより、本県の意見を反映することができます。」と述べ、重要事項は全会一致とすることなどを本県から提案していることや、現在、関係府県とも連携して県議会に関連議案を提案する準備を進めているとの説明を行いました。

・秋山コーディネーターから、「地域主権改革を実現するためには、広域連合などの取組も必要ですが、住民パワーや地域の資源を活かす取組、何よりも地域住民自らが地域の活性化に取り組んでいく姿勢が重要です。」の意見が出されました。

・最後に、主催者として、仁坂知事は、「地域づくり、住民の活動、自治体の行為、国の制度、地方分権のあり方といったことで一番重要なことは、我々が伸びていこうということを制度の中にビルトイン（組み込んでおくこと）ができるかどうかです。」と述べ、シンポジウムを締めくくりました。

●商店街のコミュニティ機能強化支援事業第1号「みかわむらびと やかた三川夢来人の館」オープン！

・7月25日、平成22年度「和歌山県商店街のコミュニティ機能強化支援事業」の第1号として、田辺市の「海蔵寺通り」に高齢者の交流サロンに産直売場を兼ねた「みかわむらびと三川夢来人の館」がオープンしました。

・この施設は、和歌山県の「ICT情報交流サロン」事業のアドバイザーが田辺市大塔村の三川地区で口にした地元料理を「三川産品はうまい、市街地でも充分売れる」と評価、三川地区の高齢者や田辺三川村人会などが一体となり、三川産品を通じ市街地住民と交流する計画「みかわげんきプロジェクト三川元気夢来プロジェクト」を立ち上げて、半年足らずでオープンしました。

・販売されている商品は、朝採り野菜や高野槇などに加え、干し椎茸やサンマ寿司などの加工品、美味しいと評判の冷凍鮎などすべての商品が三川産です。

・オープン初日は、商品が閉店1時間前に売り切れ状態になるなど大盛況でした。また、平日は三川の方たちと市街地の方を紡ぐ交流サロンも開催されています。

・田辺市にお越しの節は、是非お立ち寄り下さい。



●和歌山電鐵貴志川線「貴志駅」がリニューアルオープン！！

・8月4日、和歌山電鐵貴志川線の貴志駅（紀の川市）の新駅舎完成披露セレモニーが盛大に開催されました。仁坂知事は、「和歌山で唯一のナイト（勲功爵）受賞者で、スーパー駅長でもある「たまちゃん」に相応しい駅舎ができました。今後は、みんなで地域おこしに頑張っていこうじゃありませんか。」と挨拶。セレモニーには、新駅舎のオープンを待ちわびていた全国の鉄道ファンや貴志駅のスーパー駅長「三毛猫のたま」ファンなど、多くの方々が賑わいました。



・新駅舎は、猫の顔をイメージした外観、檜皮葺（ひわだぶき）が施された屋根、「たま」のイラストを描いたタイルが敷かれた床、ホームに併設された「いちご」「おもちゃ」「ねこ」のお社など、他には例のない駅舎になっており、駅名はそのままですが、駅舎は「たまミュージアム貴志駅」と名付けられました。



・待合室には、「たまカフェ」（右写真）が設置され、紀の川市特産のモモやスイカなど、旬の果物を使ったジュースやジェラートも販売しています。このカフェは、“フルーツ王国紀の川市”の情報発信拠点とするとともに、観光地としての魅力アップを図るため、和歌山電鐵と紀の川市、和歌山県「グルメな観光地づくりプロジェクトチーム」の三者が協働で昨年から取り組んできたものです。ジュースの作り方にも工夫を凝らし、果物それぞれの特色にマッチした独自の味に仕上げました。貴志駅は、JR和歌山駅から和歌山電鐵貴志川線で約30分。是非、一度、新しくなった駅舎においでください。



●第92回高等学校野球選手権大会出場「智辯学園和歌山高等学校」の壮行式開催

・8月3日、第92回高等学校野球選手権大会に出場する、智辯学園和歌山高等学校（6年連続18回目）の健闘を祈るため、県庁正面広場において壮行式を開催しました。

・仁坂知事は「県大会の激しい予選を勝ち抜いてきた智辯学園和歌山の甲子園での活躍を期待します。」と激励しました。

・城山主将は、「県大会では苦しい試合が続いた。敗れた39校の選手の気持ちを胸に甲子園で頑張ってきたい。」と試合に賭ける意気込みを話しました。

・智辯学園和歌山高等学校は、大会初日の8月7日、千葉県代表の成田高校と対決しましたが、1-2で惜しくも破れ、残念ながら初戦突破は叶いませんでした。

●平成22年度わがまち元気プロジェクト 第1弾！！

・地域資源を活用した、まちおこしに積極的に取り組む市町村を支援する「わがまち元気プロジェクト」の平成22年度第1弾として、湯浅町の「湯浅まちなか・にぎわい復興プロジェクト」と古座川町の「古座川版エコツーリズムによる地域産業の創出プロジェクト」への支援を決定しました。

・湯浅町は、県内で唯一、国から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された、醤油の香りただよう古い町並みを有する魅力的な地域です。さらに、まちなか歩きの受入体制を整備し、湯浅グルメの開発や味噌造りなどの体験等、伝統的な町並みを活かした個性的な観光地づくりに取り組みます。

・また、「清流古座川」を有する古座川町では、自然の保全や学習を盛り込んだ体験型商品の開発やガイドの養成等による古座川版のエコツーリズムと併せ、古座川の恵みを活かした食や特産品の開発によるブランド製品づくりを推進し、豊かな自然環境の保全と観光振興による古座川ならではのまちづくりを進めていきます。



湯浅の町家



古座川ウオーク

●和歌山市の夏を彩る『第42回紀州おどり「ぶんだら節」』、『おどるんや～第7回紀州よさこい祭り～』盛大に開催！！

・8月7日、紀州おどり「ぶんだら節」と「おどるんや～紀州よさこい祭り～」が同日開催されました。

・紀州おどり「ぶんだら節」は、昭和44年に始まり、今年で42回を迎えます。踊りに使われる「ぶんだら節」は、江戸時代の豪商・紀伊国屋文左衛門をイメージした民謡です。県職員で組織する県庁連（写真）には、仁坂知事も参加し、来年開催される「全国植樹祭」と「紀の国わかやま国体」を大いにPRしました。



・「おどるんや～紀州よさこい祭り～」は、「参加、交流、感動」をコンセプトに和歌山が活気にあふれるお祭りづくりを目指して平成16年に始まりました。今年は、過去最高の62チーム、約3,000人の踊り子が参加しました。

●第1弾わかやま版「過疎集落支援総合対策」の取組を開始！

- ・県内の過疎市町村は、平成22年4月1日現在で16市町村、その面積は県の72.7%を占めますが、人口は25.1%となっています。
- ・これらの地域では、医療・福祉、生活交通など日常の生活を支える機能の維持が難しくるとともに、基幹産業である農林水産業の低迷や地域社会の担い手不足等の地域力の低下が問題となっています。
- ・過疎対策としては、国の「過疎対策法」に基づく、主に「過疎債」を活用したいろいろな事業への支援がありますが、和歌山県では、地道なソフト事業とハード事業を組み合わせ、もう少し小さい地域に着目した「きめ細かい対策」が必要であるとの観点から、平成22年度の新政策で和歌山県だけの独自の制度として「わかやま版過疎集落支援総合対策」に取り組みます。
- ・第1弾として7市町村8生活圏（下記表）から開始します。その他の生活圏についてもそれぞれの地域の準備が整い次第開始します。
- ・「わかやま版過疎集落支援総合対策」事業は、個別の集落や市町村単位ではなく、民生生活の一体性を重視した過疎生活圏（昭和の大合併前の旧町村や中学校区等を想定）に県市町村、それぞれの地域住民の方々が一緒になって、昔風の「寄合会」を作り、課題解決に向けた話し合いを行って、地域の再生、活性化に取り組みます。県は「誰も見捨てないぞ！」という心意気で、これからも積極的に過疎地域を支えていきます。

市町村名	過疎生活圏	人口
紀美野町	真国村	431人
高野町	高野町	3,924人
	富貴村	708人
かつらぎ町	四郷村	745人
日高川町	寒川村	453人
田辺市	三川村	524人
すさみ町	佐本村・大都河村	402人
北山村	北山村	570人



●「街道てくてく旅。熊野古道をゆく」 in 東京
～パワースポット熊野が品川に出現～

- ・今年5月から約1カ月間、NHK BS 放送で「街道てくてく旅。熊野古道をゆく（春編）」が放送されましたが、9月13日から「秋編」がスタートします。これを機に、和歌山県の世界遺産「熊野古道」の魅力を、首都圏の若い世代をはじめ幅広い人たちに知ってもらうため「街道てくてく旅。熊野古道をゆく」 in 東京のイベントを8月20日、品川グランドセントラルタワーで開催します。
- ・当日は、熊野古道トータル約650キロを踏破する森上亜希子氏のトークショーや春編ダイジェスト映像と番組テーマ曲演奏、番組出演者のトークなどで熊野古道の魅力をたっぷりご紹介する予定です。また、東京では約1年半ぶりの公開となる“祈りの道”の写真展示を行います。



●アドベンチャーワールド（白浜町）のジャイアントパンダ「良浜」が双子の赤ちゃんを出産！！

・ 8月11日、アドベンチャーワールドのパンダ「良浜（らうひん）」が元気な双子の赤ちゃん（オス（158g）、メス（123g））を出産しました。良浜は、アドベンチャーワールド生まれの9歳。平成20年にも梅浜（メイヒン）・永浜（エイヒン）の双子を出産しています。現在、母子ともに元気で、赤ちゃんの公開は秋頃の予定です。皆さんもご覧においで下さい。



●南紀白浜空港の愛称として「南紀白浜パンダ空港」を検討します。

- ・ 和歌山県では、紀南地方の空の玄関口である「南紀白浜空港」を国内、国外に広くPRするため、白浜で飼育され、全国的に注目されている「パンダ」を空港名に取り入れ、「南紀白浜パンダ空港」（愛称）とすることについての検討を始めました。
- ・ 現在、白浜町では8頭のパンダが暮らしており、これは中国を除いて、世界一の大家族です。「パンダ」は極めて集客力が高く、空港を知ってもらうためのキャラクターとして最適であると思います。
- ・ 愛称を「南紀白浜パンダ空港」とし、紀南地方（和歌山）を全国・世界にアピールすることで、観光客の増加や、空港のイメージアップに繋がるものと考えています。
- ・ 愛称の使用とその活用方法について、地元市町村や地元商工・観光関係者を構成員とした「南紀白浜空港利用促進実行委員会」で検討していただき、その検討結果や広く県民の皆さんの意見を十分に聞いた上で決定します。
- ・ 全国では98ある空港のうち、鳥根県の出雲縁結び空港、鳥取県の米子鬼太郎空港、兵庫県のコウノトリ但馬空港など、20の空港が愛称を使用しています。

●平成22年度大阪和歌山県人会総会・懇親会開催

- ・ 7月17日、平成22年度大阪和歌山県人会総会がホテルウィーナ大阪（大阪市）において、開催されました。
- ・ 総会では、佐竹会長の挨拶の後、事業報告、会計報告があり、引き続いて行われた懇親会では、故郷和歌山のなつかしい話や「カラオケ歌自慢」で楽しいひとときを過ごしました。
- ・ また、会場内に、プレミアム和歌山の紹介コーナーを設けて、梅酒の試飲を行い、県産品のPRを行いました。
- ・ 当日、佐竹会長の実家（紀の川市）で収穫された桃が、お土産として出席者に配られ、「上品でとろけるような美味しさだった。」との声がたくさん寄せられています。



（挨拶する佐竹会長）

●串本町が平成22年外務大臣表彰を受賞（自治体としては初めての快挙）！！

- ・ 7月14日、串本町が、諸外国との友好親善関係の増進に特に顕著な功績のあった個人・団体を讃える外務大臣表彰を受賞しました。
- ・ 今回の表彰は、明治23（1890）年に同町大島沖で発生したトルコ軍艦エルトゥールル号の遭難事件に際し、島民の方が献身的な救護活動を行ったことを機に、長年にわたり町全体で続けてきたトルコとの友好交流が高く評価されたものです。



和歌山の旬のこだわり情報をお届けします

フルーツ王国の新スイーツ「わかやまポンチ」



フルーツ王国わかやま物語

あのフルーツも、このフルーツも「和歌山産」。だって…和歌山県は果樹生産額全国2位ですもの。中でも、梅・柿・はっさくは全国1位、みかん・すもも・いちじくは2位に加え、キウイや桃なども全国有数の産地！他にも、温暖な気候の下で、びわやブルーベリー、いちごなどが栽培されています。（平成20年農林水産統計および県調べ）

そう、和歌山県は正真正銘の“フルーツ王国”。そんな王国から生まれた新スイーツ「わかやまポンチ」物語の始まり始まり…

みんなのわかやまポンチProject

地域みんなに、和歌山に対する「誇り」や「愛着」を持ってもらいたい。地域社会・経済を活性化させたい。わかやまポンチ Project はひとりじゃなく、王国のみんなで見える夢なんです。

王国のために自分たちでできることから始めようと外食産業が立ち上がり、2009年7月10日に全国わかやまポンチ協会が発足。協会のメンバーは“ポンチスト”と呼ばれ、わかやまポンチの伝道師として普及に努めています。



わかやまポンチとは？

1. 和歌山産梅の甘露煮、またはシロップ漬けを使用すること
2. 和歌山産のフルーツを1つ以上使うこと
3. 和歌山産フルーツ等の使用が表示されていること



食べよう♪個性豊かな“わかポン”

上記の条件さえクリアすれば、わかやまポンチ。だから、この新スイーツには無限の可能性が秘められています。まるやか系ポンチ、フルーツの宝石箱のようなポンチ、海を望みながら食べるポンチ…など作り手の愛情がいっぱいつまったオリジナルわかやまポンチ（通称：わかポン）があなたを待っています♪

さて、そのわかポンは王国のどこで食べられるのかな？お店のリストはこちらから★ <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071700/ponchi/shop%20list.pdf>
※あなたも始めませんか？和歌山県は「わかやまポンチ登録店」を募集中!!



笑いあり、涙あり！試作コンペ開催

コンビニスイーツ化に挑戦！～和大附属小学校×ファミリーマート～

この秋、わかポンのコンビニスイーツ化が決定！和歌山大学附属小学校の4年C組の児童とファミリーマートがコラボし、商品化に向けて奮闘中です!! 先月、特別授業「和歌山県の農産物について(講師:県職員)」や「デザートができるまで(講師:ファミリーマート社員)」を受けた児童たちは、6班に分かれて7月9日に「試作コンペ」を開催しました。

①「わかポンを食べて笑顔になってほしい、元気になってほしい…」そんな想いが込められた子どもたちの作品。カラフルで、とことん“和歌山産”にこだわっています。



②スクリーンを使ってプレゼン。
ドキドキ♪



③「どの班もレベルが高い…」と悩む審査員たち。ポンチを試食中。



④ついに、
結果発表…
「お願い!!」と
祈る子どもたち



ベストポンチの行方は…！？



さて、ベストポンチに選ばれたのは… 6班の「3S(スイート・すっぱい・スイーツ)」でした！パンナコッタをベースに、あら川の桃や県産すももを使用。梅の甘露煮は種を抜いて4つに切り、お花の形に盛りつけました。

どの班のポンチも工夫され、郷土愛が詰まった素晴らしいものでした。ベストポンチに選ばれなかった子たちはとても悔しがり、涙しそうな子もいましたが、それだけ一生懸命取り組んだ証拠。そんなひたむきな彼らの想いやアイデアをしっかりと受け継ぎ、これからファミリーマートが商品化していきます。ぜひ、この秋ご賞味くださいね！

～ 稲むらの火（濱口梧陵）・南紀男山焼 広川町 ～

稲むらの火（濱口梧陵）

・文学者小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「生ける神」と賞賛した濱口梧陵。梧陵は1820年、紀伊国広村（現在の和歌山県広川町）で生まれました。父 濱口七右衛門は広村や千葉の銚子で醤油製造業を営む豪商。梧陵は12歳の時、本家の濱口家の養子となり銚子で現在の「ヤマサ醤油」の事業を継ぎます。

安政元年（1854年）、梧陵が広村に帰郷していた時のこと。安政南海地震が発生し、大津波が村を襲いました。「村人を安全な場所に誘導するにはどうしたらいいか…？」と考えた梧陵は、稲むら（稲束を積み重ねたもの）に火を放ち、その燃え上がる火を目印にし、多くの村人の命を助きました。

その後、津波にあった村を復興させるため、私財を投じて、被損した橋の修理や、農業や漁業の道具の提供。そして、4年の歳月をかけ、津波から村を守るための高さ5m、長さ600mの広村堤防（国の史跡に指定）を築きました。毎年11月3日には、「津波祭」が開催。遺徳を偲んでいます。

教育面では、江戸時代末期に梧陵は私塾を開設。剣道や学業などの指導をしました。後にこの私塾は「耐久社」と呼ばれました。1880年に新築された建物が「耐久社」として広川町立耐久中学校の校門脇に保存されています。（県史跡）



耐久社

南紀男山（おとこやま）焼

・「紀州の名産」として、高く評価されている焼物があります。それは1827年に、崎山利兵衛が、紀州藩の支援のもとに窯を開き、50年余り焼き継がれた「南紀男山焼」という陶磁器です。男山焼きという名は、広八幡神社の東の小高い丘（男山）の南面に窯場があったことから。広い場所で大規模な設備もあり、生産量は紀州一を誇りました。陶土など原料は広川町周辺から採り、有田市の陶器商人によって江戸、大阪から全国に船で積み出されました。陶工として優れていた崎山利兵衛は、経営者としても卓越。名人気質の土屋政吉や、たくさんの陶工たちとの技と情熱によって、多くの作品が生まれました。美を追究した作品もありますが、主に作られていたのは、庶民の日用雑貨で、今も変わらず素朴な美しさとぬくもりを人々に伝えています。（広八幡神社には、南紀男山焼の狛犬1対があります。）

～編集後記～

今年の夏は、酷暑という言葉でも表現し難いほどの暑さに日本国中が見舞われておりますが、皆様方には、いかがお過ごしでしょうか。決して無理をせず、お体に気をつけてお過ごしいただきたいと存じます。

さて、先日、NHKの総合放送で「ぴあのすとおりのい〜ピアノが語る明治・大正・昭和〜」という番組が放送されました。その中で明治時代に国産ピアノの開発に挑戦した和歌山県出身の「山葉寅楠（やまは とらぐす）」氏が紹介されていました。

山葉氏は、和歌山市に生まれ、紀州藩の天文係をしていた父親の影響で、幼少の頃から機械への関心が深く手先が器用でした。明治20年に浜松尋常小学校のアメリカ製オルガンの修理を手がけたことをきっかけに、国産のオルガン製作を決意、苦勞を重ねながら、ついにその製造に成功します。

そして、日本楽器製造株式会社（現：ヤマハ株式会社）を設立し、初代社長に就任します。その後、ピアノの国産化に取り組み、明治35年には国産初のグランドピアノを完成させます。まさに紀州が生んだ先人が、その進取の気性と勤勉な姿勢で日本の楽器産業の先駆者となったのです。

日頃、何気なく聞いていたピアノやオルガンの音色も、こうした歴史を紐解いていくと、また違った意味で心に響くものとなります。

和歌山だより4月号で紹介しましたが、「きのくに志学館（和歌山市西高松一丁目）」で開催中の「紀の国先人展」では、和歌山県にゆかりのある多くの先人達を紹介しています、和歌山に帰省の節は是非お立ち寄り下さい。

知事室秘書課長 藤川 崇

★「和歌山だより」Web版を和歌山県ホームページにアップしています。Web版ならではの美しい画面を楽しんで頂けますので是非ご覧下さい。

和歌山だよりに対するご意見・ご感想をお聞かせ下さい。また、皆様がお持ちの和歌山に関する情報をご提供下さい。今後、皆様のお声を紙面づくりに活かしていきたいと考えています。

（下記のFAX（様式自由）、E-Mail等をお願いします。）

■FAX 073-422-4032

■E-mail e0001003@pref.wakayama.lg.jp

和歌山県のホームページ

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/>

ふるさと和歌山応援サイト <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/furusato/>

*個人情報につきましては、「和歌山だより」の発行以外の目的には、使用いたしません。



2010年（平成22年）8月 NO.29

和歌山県 秘書課

〒640-8585 和歌山県和歌山市小松原通1-1

TEL 073-441-2022